中村俊定文庫
文庫 18
184

享保八年

嵐雪十七回忌

文庫18
184

はせ我老人桃青の時高弟二十かせむふひ
丶かせ逆後（笈乃小文　おくの細道）是等乃田家よ新古なく
数千人に風雅をよく施してある時深川の
旧庵にしばらく禁足せられ（朝かほや昼ハ鎖おろす門の垣）
明る年の桃乃前書ハ（門ゝ桃さくら　あり門人に　（別行）　其角嵐雪をもてり）
此大木朽て穴を窺ふに畀に口に耳に枅に
幻に似たるその聲味有て今慕ふにたらす
それ誰やせめても友を及して艸庵の風鈴
の音なつかしき近に序跋ニ求す唯一會を

手向し侍る癸卯十月十三日去峯嵐雪居士

十七回忌

雪堂百里拜

雪堂におゐて真行

こからしや柏の古葉有なから　楸下

炙にめくりあふすり古木の餅　琴風

泉水の船路とのは厩にして　白雲

色つく艸にむく犬の足　我兄

村かくれ夕月なれハ稜の音　序令

星の逢瀬の木履たか捧　百里

むかしにて見苦しからぬ書袋　琴風

立顔もなき松に露の子　楸下

一二輪粧の陽を譲られて　我兄

霰にちひた窓にか霞山　白雲
夜食には人の為なる筆の海　百里
世間の墓を凡のから臼　序令
行時ハ船を北に見て熊の洞　楸下
よそのうちみへはいる腕こき　琴風
実の兄よもや鶯をハ月の中　白雲
花ちる耳に弥陀の数飛ッ（升）　我兄
天竺の夢にそ春のはしら建　序令
宿定まらぬ（石へ石か）河豚の頭取　百里
（ナ）あたら手を右筆の外見さりけり　我兄

旅の器量ハ下帯もなし　白雲
おもハする見盃にほとゝきす　百里
鉢に変して妹が撫子　楸下
百小町島芋の花を見て居るは　琴風
目の誘ハれに十徳を掛　序令
あなかちの卒忽にあられ灰こほれ　白雲
岩座の奥は怖（怯か）くゆかしき　我兄
過す時一ツハ波に入子鉢　楸下
人数半分月に見消され　百里
金売の供して行秋の蝉　序令

箸に用捨は朱〔朱（米カ）〕の上の露　琴凡

小僧より月に立うるゝ法の声　百里

筆に嗅する傳來の笛　白雲

寄れは寄る物よ熱／＼左り利　我兒

宅暑の非強〔強カ〕素麺に湯は　秋下　〔ヒ五オ〕

きのふ花けふも晴たり涼竹麺　席令

海こし一片蝶の降る空　琴凡　〔ヒ五ウ〕

懐旧

たらちねと葉ふ石碑や小春影　玉尋

遠き香の声や會式の花の雲〔空カ〕　沾洲

中十日佛とあそ子小六月　琴凪

禪心の灰やむかしの桐火桶　白雲

初雪や奇麗に跡る九の文　席令

膝組の雨夜を捨ふ落葉哉　雪凍　〔ヒ六オ〕

匍匐いつ今ハなき名の霰栓　乱架

雪霜や墓の檜杉の半月に　我兒

遺跡ははいかい名所枯柳　凡葉

綫田向枯埜の露そ充の袖　風洗

俳諧の家隆と計松寒し　庄山

我手いるゝそとの句能
残るむかしを今に傳ヘ
流禅たり

簾巻け女の手より茎の桶　敬雨　六ウ

いく霜を梢に残るえの袋　素丸

其額やかねて恵比須の条月　長水

うわさ聞手子さ詠すふ冬牡丹　葵女

妙法の手をとらしや散紅葉　晋如

差別なく見し淡雪や積る年　文露

省る紫紙子やおもかげや　甫盛　七オ

葛餅や練られて累のもとの色　南詢

都守すやある十月の橘の実　討菊

夢清し（清カ消カ）みちんに明の東（東カ）山　蔵牛

禅林に酒なし紅葉散（散）果る　旅山

其まゝに手向ん蕪の菩薩なし　文錫

白雲や月にこぼれ会鳴千鳥　蕉戸　七ウ

居士一とせ下野那須より
目前に杖つく鷺や柳陰と
一ひらの前書もありけるを
おもひ出て

浮橋や杖つく〳〵としく小鷺　周竹　八オ

独吟　　　　百里

輪光の消かゝりけり冬の山
枯てこし薄はなをと用る
蛤の煙は松に戻すらん
鎗に桐油のいとゝ淋しさ
何にも戸を横にして涼む月
レ八ウ
よれによれたる錫の挽屑
うどん桶捨るに等し森の下
川へ来て干ス大海の綱

本性に帯仕置せは鞘のなき
借'銀'和して雪の'散乱
庭神楽の取廣たる昆布鯣
釣瓶ふたつをぬけて行月
レ九オ
小男鹿の声つかハする比岩象
露をく神に火入かゝえる
辻番のうしろ黒塚夢博奕
錐にはたらく俎箸の隙
散込てたひら（手）一面谷の花
頴静にも観音の雛子

MARUZEN I

ささらさの皆になる日ハ　其角居士
寐すに明して泊客人
笋の林なからにあおり池の
片約束の暮に鞭うつ
赤裏の色のか袂に鼻入て
聲の薬をたしなミにけり
帆の先に小家ゆかしき檣（播）广浮
弱ミ出たる盆の実称
髪剃の砥に起さるゝ朝の月
其屋の壁の落て留槽

レナオ

住古の筆にて（在カ）物ハえせかね
嫁と姑の遠からぬ膝（條）
切れよしい輪珠数を長く結ひかへ
猿に譲りてほとゝぎす去
あかつきの酒の匏に宕（岩）なし
檣に經子の友子傍輩
畫の額は年もようすに花衣
柳の風にあそふ足もと

レナウ

レナオ

我児

菊見むと廿六夜のとまり釜

千とせの葛瓜出に膝折　序令

鷹折の箱ハ斧の柄笑ひ来て　沾洲

売そこなひの石も夕露　晋如

肩骨も引つる月の天の河　白雲 十六

仕舞越とは閨の片戸を　百里

生くと苞の透目の池の物　琴風

葉にはさまれて花のさく枇杷　執筆

高坂の息は空ふく土車　序令

鷄と蜷蜒とにかゝる後朝　我児

折ふしの逢事にさへ珠数をもち　晋如

五倍子のかね焼の坤町　沾洲 十二才

丸なから抜て玉子の売の月　百里

烁の手柄は花のない森　白雲

暑にし漸寒にも前の不二　我児

菓の中より八十の瞟　琴風

お頸を乗せて参る二六市　沾洲

いつもの陽を朦まき行　序令

後から鉄荷とも見ゆる結ひ帯　白雲 十六

8

鵜の墓寺は思ふ道筋　百里
学
春こみをうける合点の竹履取　琴風
尺にしあまる棒油かな　晋如
棒
忘こぶつに樗の下の念佛者　沾洲
今朝も夕の板に通俗　我見
ヒ
島本の牛にもたれて錢長し　序令
路
ひしげ次第の低り座の秋　琴風
ヒ十三オ
月もはや入にあこようまもてこよ　敬雨
芦桶も問す事繁き鴫　白雲
袖つめて額に角八半世界　百里

何の労療宮へつき出せ　沾洲
う
持心ゆかすぬ箸のたつから　晋如
亀毫と呼ぶ名はいまたやし　敬雨
百軒か百軒伊丹酔せおる　我見
ヒ十三ウ
僧に喰する蒜は別　琴風
常よりも足に許かく花の道　敬雨
立つりに發古たかく船　百里

右此世六句ハ席令の會席也
予おそく来入て満坐し終
折から百里雪中庵の懐旧ホ

これ残巻まよくもふけるの
交りや沉白きをおしへ酒ハ
私をかす実とこゝろハ世尽よ
その言葉の絶さす再會を
たのしみとしてことふくものか
那辞、

敬雨

享保八癸卯陽月日

宇白板

七十四才